旧徳中 城南高 同窓会々報　第 96 号

城南高校同窓会の皆さま、お元気でいらっしゃいますか。
新型コロナウイルスが収束せず、同窓生の皆さまともなかなかお会いできないまま、今年も8月の同窓会総会は中止となってしまいました。
直接にはお会いできませんが、会報では、全国の同窓生の皆さまから近況や城南での思い出など魅力いっぱいの報告が届いています。
まずは、今年の総会幹事担当学年（平成４年卒業）の皆さんからのメッセージです。

本年度総会幹事担当学年（平成４年卒）からのメッセージ

「ＪＯＮＡＮと城南」　島一輝

卒業して三十年が過ぎようとしています。五十歳を目前にしても、城南高校で過ごした三年間が今でも色濃く私の人生の中に残っていることが、不思議なものだなと感じます。とはいえ、当時からこうなるとわかって意気込んだ生活をしていたわけでもなく、ただなんとなく過ごし、部活動に励み、友達との何気ない会話に笑い、将来のことよりも「今」に目を向け楽しんでいました。その後、幸いにも教員となり、恩師と同じ数学を教え、たまたま高校野球の監督ができ、二十年間生徒とともに白球を追い、「チームの勝利に勝るものはない」と信じ頑張ってきました。そして、母校で教鞭を執るようになったとき、初めて、城南高校で過ごした三年間があったからこそ、「今」こうして日々の生活が送れているのだなと実感し、感謝の気持ちが湧いてきました。

「今」城南高校は、校舎が建て替わり、応用数理科を軸とした「ＳＳＨ」に認定され、自ら問いを立て解決に向かう探求活動に重きを置いた、正に新しい「ＪＯＮＡＮ」が躍動しています。しかし、監督として赴任した初日、グラウンドから見る「ＪＯＮＡＮ」は、徳島のシンボルである眉山を背景に、当時と何ら変わらない「城南」の雰囲気を醸し出していました。

変わるものと、変わらないもの。変えてよいものと変えてはいけないもの。変化・成長が求められる新しい時代に突入していますが、こうやって私の心の中に変わらず存在してくれている「城南」を大切にし、残りの人生、新しいことにどんどんチャレンジしていきたいと思います。このような文章を書く機会をいただけたからこそ気づいたことでした。ありがとうございました。

徳島を離れて３０年　田中基文

クラスメートだった島一輝君からの久しぶりの電話を受け、当時のことを懐かしく思いつつ近況を報告させていただきます。高校時代の思い出といえばバスケットボール、担任で数学の中野公彦先生、文化祭でのファイアーストームなどなど。卒業して進学した神戸の地に移って３０年、現在４８歳。月日の経つのは早いものです。現在は明石にある兵庫県立がんセンターで医師として働いています。

専門は消化器外科（主に肝臓）ですが、消化器のがんは手術で確実に取り除くことが治すために必須で、抗がん剤が進歩した現在でも変わりありません。最近は技術革新により、腹腔鏡手術やロボット手術による体の負担が少ない手術が主流となっています。患者さんに寄り添い、がんを治す手助けが少しでもできるよう日々奮闘しています。故郷を離れて３０年経ちますが、徳島を愛する心に変わりなしです。また同級生の皆さんと再開できるのを楽しみにしています。

正門からの風景　木下勝弘

高校時代の思い出話を一つさせていただければと思います。ある日突然、正門から入ってすぐの校舎の壁に大きな幟がかけられました。みだしなみに注意することや時間を守ることなど、ごくありふれた注意書きの内容で、その時代には正門近くにそのような標語を掲げている学校がむしろ大多数で、それまでなかった城南高校は珍しかったのではと思います。

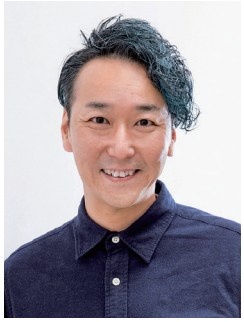
当時、生徒や先生方のエッセイなどを集めて定期的に出されている文集がありました。幟がかけられた後に発行された文集をある日読んでいると、生徒から「城南だけはあんな幟がないのが誇りだったのに・・・」のような意見が多く出され、驚いたことに複数の先生方からも「自主自律を重んじる校風が失われつつあり寂しい」という意味合いの文章が投稿されていました。

その後ほどなくして幟が校舎の壁から消えたのを記憶しています。先日所用で城南高校にうかがう機会があり、何もかかっていない校舎の壁を見て、なんとなくほっとした気持ちになると同時に、昔が懐かしく思い出されました。

須見一仁

皆さん知っていますか？『旧徳中・城南高校同窓会・総会』が毎年お盆の時期に開催され、
卒後３０年目には、総会時の担当学年としてのホスト役を務める事となっている。
そして総会後、担当学年だけでの同窓会がある。
担当学年の幹事は卒業時に選ばれるらしい。
先輩から「様々な年代の卒業生の皆さんと交流することは、自身の財産にもなるし、
ふとした会話が徳島県の発展に繋がるきっかけになるんじゃない」とのことで、参加している。
僕は現在、県議会議員として徳島県の発展に微力であるが尽力している。
卒業生の皆さんとの交流が、徳島県の発展に繋がっている。
色んな人々との繋がりが、社会経済を動かすこともある。まさにこの同窓会が
発展の一翼を担っている。今年もコロナで中止である。残念。
会報に執筆してと言ってもらえたので、同窓会・総会をアピールしてみた。
会報をご覧の皆さん、再開されたら興味を持って、奮ってご参加を !!

岡部斗夢



「まちづくり」と言う泥沼に足をつっこみ、もう２０年近くになります。

その活動拠点は万代中央ふ頭という水辺の倉庫街。昭和の高度成長期を支えたその街は、かつての機能をマリンピア沖洲に移管されてからというもの、船が停泊せず、空き倉庫が立ち並ぶ寂れたまちになっていました。でもそこはぼくにとって、何やら不思議な魅力を携えた場所。何もかもが便利になることで逆に感じる不安を忘れさせ、また、趣と憂いが誘う可能性を感じさせてくれるところでした。

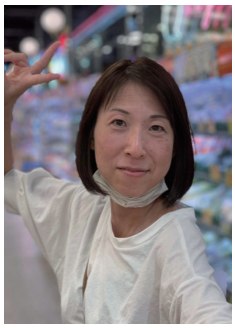
その後紆余曲折ありながら、今は空き倉庫が店舗や事務所としての利活用が進み、新しい風が吹く街へと緩やかな成長が続いています。

奇しくもこのまちづくりには城南同窓生の顔がたくさん並び、イベント本番前はまるで城南祭前夜の様相。「大人の学園祭」を裏テーマに楽しくやっています。

皆さんもぜひ一度お立ち寄り頂けますと幸いです。数々の新しい光が産声をあげ、新しい夢が育つ港の倉庫街・万代中央ふ頭を、ぜひご体感ください。

株式会社ユニフォーク 代表取締役
NPO 法人アクア・チッタ 理事 / 事務局長

向井育子（旧姓：西岡）



城南高校卒業生の皆さん、こんにちは。私は、城南高校を卒業後、地元の看護専門学校に入学し、現在は総合病院で看護師として働いております。就職して今年で２７年を迎えました。

これまで様々な疾患に関わり、ケアをしてきた中で、私が最も注力したのが「ストーマ」です。人工肛門、人工膀胱といったほうが分かりやすいでしょうか。

私はこのストーマに関するエキスパート資格取得を目指しております。が実はここだけの話、過去３回、教育機関入学試験に失敗しています。その不合格通知を受け取るたびに自信を失い、次の受験は無いと諦めようとする私。でもそんな私に上司や職場の仲間はその都度支え、励ましてくれました。ありがたいものです。おかげで今年も４回目のチャレンジをする決意ができました。

老眼も始まり肉体的にも厳しいですが、自分がやりたい道を極めるため努力を重ねてみようと考えています。

こんな私の話を聞いて、年齢を理由に何かを諦めようとしている人の一歩を踏み出す力になれたら幸いです。

あのころ、そしてこれから　林 健 司

サイコーの高校生活だった。

笑い声と駆ける靴音が絶えない長い廊下。
打球音にホイッスル、掛け声が心地よく響く校庭。
文化祭。バンド演奏前特有の緊張感。
ＦＳでしか味わえないあの高揚感と虚脱感。
バラバラなようで意外と一体感のあったクラスメイト。
一緒に笑って、本気で怒ってくれた先生方。

あのころは、そのどれもが「当たり前」のように思っていた…けれどそうじゃなかった。
大人になって、コロナ禍におかれて、思い知らされた。

諸先生方、諸先輩方、後輩たち、そして同級生のみんな。
これからも、前向きに力強く生きることをここに誓おう！

最近、気付けばフジファブリックの「若者のすべて」を口ずさんでたりする。
でも決して、昔のことを恋しく懐かしんでいる訳じゃない。
いい歳になった今でも、ココで出会った仲間とは仕事でもプライベートでも繋がっているから。

新旧会長のご挨拶

新同窓会会長　酒池由幸（昭和 50 年卒）

プロフィール

氏　　名	酒池由幸（さかいけよしゆき）
年　　齢	６５歳
最終学歴	大阪府立大学経済学部卒業
現　　職	徳島県副知事
趣　　味	徳島ヴォルティス観戦、旅行、ゴルフ

城南高等学校同窓会の皆様、初めまして。この度、粟飯原前会長からバトンを引き継ぎました、昭和 50 年卒の酒池と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。

2025 年に 150 周年を迎える、伝統ある城南高等学校の同窓会長に選任いただき、大変光栄に思っております。

同窓会の皆様方には、これまで会員相互の親睦をはじめ、様々な同窓会活動を通して、母校の栄誉と伝統の継承に、永年にわたりご貢献いただきました。そのご労苦に対し、改めて感謝と敬意を表します。

また、城南高等学校においては、現在、文部科学省スーパー・サイエンス・ハイスクール校（SSH）に指定されるなど、特色ある学校運営がなされており、これからも新たな伝統の創造が大いに期待されます。

なお、私事で恐縮ですが、在学中は、硬式野球部に所属し、甲子園出場という見果てぬ夢を追いかけておりましたが、後輩たちがその夢を見事実現した際には、本当に感動いたしました。各部活動においても、いろいろな場面で活躍している姿を目にすることが多くなり、大変心強く感じております。

私は、これまで、後援会長として、毎年、７支部（阿波銀行、徳島大正銀行、日亜化学工業、徳島新聞社、四国放送、徳島市、徳島県）を中心に、同窓会の皆様方にご寄付を募り、母校の教育の充実や部活動のサポートなどに資するための活動に取り組んで参りました。

今後、同窓会長として、先輩諸氏の築かれた伝統や実績を十分踏まえながら、各年次の皆様方とのリレーションや情報発信力の強化、プレゼンスの向上などに、十分意を用いながら、後援会とも連携し、母校のさらなる発展に、少しでも貢献できるよう全力を傾注してまいる所存ですので、ご理解ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

前同窓会会長　粟飯原（あいはら）治仁（昭和 51 年卒）

この度、４期８年間務めさせていただいた同窓会長職のバトンを、酒池由幸さん（昭和５０年卒）にお渡しします。８年前（平成２６年）、台風の徳島上陸も懸念された８月同窓会総会開催の日、幹事のみなさんのご尽力で開催された同窓会総会で、会長職のご指名をいただきました。あれから８年。

同窓生のみなさん、理事、副会長、監事ら役員のみなさん、元事務局高木純一郎先生、現在の事務局船越隆子さんらのご支援のおかげで、会長職を無事務めさせていただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

卒業後、何十年と経った同窓生のみなさんの人生を、同窓会報に寄せられた原稿で知ることができます。城南高校３年間の生活は、卒業生一人ひとりにとって、将来の幸せな人生を育て、実らせるための大きな植木鉢だったように思えます。卒業生や担当幹事さんらみなさんの人生の実りを、会報の原稿に感じました。

次期会長酒池さんは、公には、徳島県副知事の職にあり、２０２５年、創立１５０周年を迎える城南高校の同窓会長としてふさわしい方です。同窓生のみなさんには、これからも母校城南高校の発展と、同窓会事業の継続のために、ますますのご協力をお願いし、私の会長退任のご挨拶とさせていただきます。

同窓会で、お目にかかりましょう。みなさんお元気で。

ありがとうございました。

新旧校長のご挨拶

前校長　前田茂

退任にあたり、同窓会の皆様にご挨拶を申し上げます。

創立１４７年を迎えた歴史と伝統に輝く城南高校が、最後の勤務校となりましたこと大変光栄で、実り多き２年間となりました。３６年間の教員人生を振り返りますと、微力ながら、子どもたちの夢や志の実現に向け、学校目標の推進や課題の改善に取り組んで参りました。集大成としての２年間、徳島城南の目指すべき位置をしっかりと見据え、同窓会をはじめ後援会・松柏会の皆様のご協力により、自主自立・文武両道の校風を発揚・継承できたこと心より感謝申し上げます。コロナ禍にあっても、徳島城南の誇りが感じられ心強いものがありました。

同窓会活動においては、粟飯原会長様、船越事務局長様、高木前事務局長様、関東支部では三橋様、近畿支部では糸田川様を中心とする洗練された活動に感銘を受けました。残念ながら、多くの皆様と直接お目にかかることがかなわず、大変失礼をいたしましたが、オンライン等を活用したハイブリット型の同窓会活動は、絆や思いをさらに深めるものでした。常に、母校や生徒、教職員のことをお考えくださり、物心両面でご支援をいただきましたこと、本校教育の充実．発展の原動力となりました。また、創立１４５周年の同窓会名簿にも寄稿させていただく機会に恵まれました。

令和２・３年度の教育活動では、同窓会の皆様が愛して止まないファイヤーストームを本来の形とは異なるとは言え、辛うじて継続できたこと、スクールミッション「未来を切り拓くイノベーター（革新者）の育成」に向け、グランドデザインをもとに第Ⅳ期スーパーサイエンス事業を推進するとともに、地道な大学入試共通テスト対策が実り、進路実現において、直近１０年間では２年連続過去最高の合格率を残せたこと、生徒の真摯な努力に城南高生の意地とプライドを感じたところです。

コロナ禍での教育活動の制約は、アメリカ研修旅行、修学旅行の中止等、苦渋のものとなりました。一方、一人一台端末の導入に向け、東大金曜特別講座やオンライン教材を他校に先駆けて導入したことにより、ＧＩＧＡスクール構想の着実な構築につなげ、今後の教育DXのさらなる推進を期待させるものとなったと感じています。

ウクライナ危機により、国際社会の緊迫感が格段に高まっていますが、城南高校の校歌には「築く平和」「開く文化」「これぞ自由と正義」という普遍的な理念が盛り込まれています。高校時代の学びや部活動、学校行事等を糧に、次世代のリーダーとして、こうした普遍的な理念を守り抜き、未来を切り拓く人財として、互いに協働し、当事者意識をもち、様々な課題の解決に全力を尽くしてほしいと願っています。

最後になりましたが、同窓会のご発展、皆様の益々のご活躍、ご健勝と、創立１５０周年を目前とした城南高校のさらなる躍進をご祈念申し上げ、お礼の言葉といたします。

校長室の優勝旗

新校長　三井敏之（みなみ）

本年度より校長として赴任しました三井敏之（みなみ）です。城南高校では初めての勤務となりますが、我が母の母校でもある城南高校での勤務に不思議な縁を感じております。私は、国語科教員として採用されて以来、城ノ内高校、県教育委員会などの勤務を経て、昨年度までの２年間は、板野高校の校長を務めてまいりました。歴史と伝統の在る城南高校で、子ども達の健やかな成長と希望進路の実現に力を尽くしたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

城南高校は昨年度、県教育委員会よりスクール・ミッションとして示されたように、「県内で最も古い歴史と伝統の中で培われてきた「自主自立」の精神のもと，応用数理科の課題研究と，そのノウハウを活用した普通科の探究活動などをとおして，「未来を切り拓くイノベーター（革新者）」として必要となる力」の育成を期待されています。

一昨年前から続く新型コロナウィルス感染症との戦いは、私たちの生活に大きな変化をもたらしました。日常生活でも手指消毒やマスクの着用も既に当たり前のこととなり、徳島県全体を見ても、修学旅行や各種大会の中止や延期、様々な行事の規模の縮小や部活動等の活動制限など、学校を取り巻くこれらの変化は、子どもたちの学びにも大きな困難をもたらしてきました。

広く社会に目を向ければ、地球温暖化に伴う相次ぐ自然災害の発生や、世界的な脱炭素社会に向けた加速度的な取組みをはじめ、デジタル技術を活用した新しいコミュニケーション方法の確立や、「メタバース」などの仮想空間の実用化など、世界の変化は、私たちの想像が及ばない分野まで急速に進み、今、時代そのものが、大きな転換期を迎えています。このような時代の大きなうねりの中にあって、「自主自立」の校風のもと、輝かしい城南高校の伝統を継承していく生徒たちへの同窓会の皆様のご支援やご協力は大変心強く、ありがたいものと感じております。

現在校長室には、女子バレーボールや卓球、テニスやソフトボール、空手道にライフル射撃、少林寺拳法といった各運動部の優勝旗が９本並んでいます。文化部においても数多くの素晴らしい成果を残しており、まさに「文武両道」を体現し続けています。

平成３０年度に第４期の指定を受け、５年間の研究を進めてきた文部科学省事業のスーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）も今年が今期の仕上げの年となりました。応用数理科と普通科において進めてきた研究の成果を、様々な形で具現化していけるものと期待しています。

最後になりましたが、同窓会の皆様のこれまでの御支援に改めて感謝を申し上げるとともに、頑張る城南高校を引き続き温かく見守っていただくことをお願いし、重ねて皆様のご健康とご多幸をお祈りしております。

伝統に抱かれて

旧職員社会科　板東英雄（昭 62 ～平 10）

昭和 62 年から平成 10 年までの十一年間、社会科、特に日本史の教員としてお世話になりました。現在、徳島県立文書館で主任文化推進員として勤務しています。城南高校に赴任し、始めて一年生のクラス担任となった時、すぐに感じたことは、生徒たちの素朴で個性ある生き生きとした姿でした。その若さ溢れる個性はクラブ活動・城南祭・クラス行事などで遺憾なく発揮され、生徒たちの内に秘めた力に改めて感心させられました。そのクラスの数人とはその後も親交があり、ファミリー的ムード漂う城南の暖かさを今も感じています。また去年、その教え子の子供が卒業式で答辞を述べたと聞き、「子育て」よく頑張ったねと賛辞を届けたい心境です。と同時にふと我に返ると「年を取ったなあ」と思う日々でもあります。授業では郷土に興味・関心を持っていたため、よく徳島の歴史の話をしました。また休日にクラスの生徒と自転車で史跡巡りをしたのを、ついこの前の様に思い出します。厳しい受験戦争の真っ直中ではありましたが、城南高校のキャパは広く、それなりに自由があり、勉強をはじめ学校生活は楽しめたと思います。

私が歴史を学ぶきっかけとなったのは高校時代の恩師（城南高校出身）との出会いが大きかったと思います。受験生にとって歴史は歴史的事項を暗記する教科でしかなく、社会科学として日本史を語る恩師の授業はレベルが高く、その意図する所の多くは理解出来ませんでした。しかし真摯に日本史を語る教育者・研究者である恩師の姿勢・人柄には人を魅了するオーラがありました。教職についてから今日まで末永く長くご指導を頂いていますが、私の授業は恩師の授業をまねる事から始まったように思います。

さて、現在勤務の徳島県立文書館では古文書や過去の写真の整理、各種学習会のサポートなど様々な活動を行っています。なかでも地域の古文書には、その地ならではの出来事が記されており、興味を駆り立てられます。今、これまでにかかわったなかで特に印象に残っている「森家文書」（和田島）を少し紹介します。三方を海に囲まれ紀伊水道に面した和田島は、潮待ち、風待ちの湊として有名ですが、その和田島港に江戸時代、たびたび日本海側から幕府の年貢米を運ぶ「御城米船」が入港していました。これは増加する江戸の人口を賄うため、幕府の命を受けた川村瑞賢が寛文 12 年 (1672) に開発した西廻り航路により、瀬戸内海から明石海峡・鳴門海峡・小鳴門海峡を通過して、江戸へ向かう船が、何らかの事情で入港したものと思われます。元禄１０年（1697）の記録には「西国より江戸廻りの御上 (城) 米船度々船懸り仕候」と記されており、この頃には「御城米船」が度々入港していたことが解ります。この「御城米船」の入港は、直ぐにこの地域の「御城米船」を統括している川之江の御陣屋 (幕府直轄領に設置) まで報告することが定められ、和田島の庄屋から郡奉行手代・郡奉行――藩境の佐野村の庄屋――川之江の村々――川之江御陣屋へと村継ぎにより届けられます。そして、もし報告書などに不備があると、直ちに庄屋たちはその対応に当たらなければなりませんでした。例えば、文久 2 年 (1862) に入港した御城米船は、提出書類に「差札」が無いと川之江御陣屋から差戻しの書状が徳島藩の方に届き、庄屋たちは藩の命令を受けて川之江御陣屋まで出向き、川之江大庄屋の力添えを得ながら事件処理に当たっています。この事件の処理を始め関連する文書からは、江戸時代の厳格な身分制社会のなか、官僚機構の末端に位置づけられ事の処理に当たる庄屋たち村役人の苦悩を垣間見る事ができます。これは江戸時代の話ですが、現代社会にも通じる事柄だと思います。少し大袈裟かもしれませんが、歴史を学ぶ事は、社会を正しく知り、より良き未来の姿を創造することに繋がるのでは無いかと思います。(詳しくは徳島県立文書館研究紀要第八号「阿州和田島へやって来た御城米船」を参照して下さい。)

---- 文化 11 年 (1814)　和田島の絵図 ---

県立文書館では毎年、徳島に関係ある事柄を紹介する企画展を年 4 回、開催しています。昨年度の第一回目の企画展は「徳島を伝える絵はがきの魅力」と題して徳島の風景・風物・人物など徳島とゆかりある様々な絵はがきを中心に紹介しました。その展示の中に「武田先生頌徳碑落成記念」絵はがきがあります。『徳島中学校　城南高校百年史』によると、幼き頃より父・梅太郎から和算の手解を受け、後に藩校長久館で学び、明治 12 年２月徳島中学に奉職し、59 才（大正６年 12 月）で亡くなるまで、徳中で教職に携わったと記されています。生徒に慕われた先生の葬儀は徳島中学同志会により校庭で行われ、大正７年７月には故武田先生記念事業会が生まれ、その後、頌徳碑除幕式が行われました。今も敷地内に武田先生頌徳碑が当時のままの姿で建っています。また、「徳中生が見た大正期の教師たち」の中には徳中教育の現実、教師たちとの触れ合い、徳中生たちの苦悩などが赤裸々に記されております。そこには管理教育・スパルタ教育と立身出世主義教育の中で苦しむ徳中生の姿を見ることができます。しかしそんな時でも、生徒たちに、学問の素晴らしさや厳しさ、さらに夢や希望やロマンを語る教師がいたことも紹介され、徳中の教育力・懐の深さを感じさせられます。また軍国主義時代に徳中教育に心血を注ぎ、「本領は反体制ではなかったにせよ、非体制乃至厭体制であった」とされる深井源氏校長の教育にも目を奪われます。学徒動員強化の推進母体となる振励隊に対する「可能な限り最小限に止める」の言葉からは、「軍国主義の風潮に全面的には埋没仕切らぬ校風」があったように思われます。この時代と向き合う精神は、長年により培われてきた徳中の伝統であり、貴重な遺産といえるのでは無いでしょうか。

---- 徳島県立文書館の写真（旧県庁正面玄関）---

初めて城南に赴任したころは学ぶことが多く周囲を見渡す余裕はありませんでした。しかし、学校に少しずつ慣れ、先生方との交流が多くなるに従い、多くの先生方が自由・闊達であり、教育・社会問題を真剣に話されている姿に幾度となく出会いました。この理想に燃え、次世代の青年を育てようとする城南高校教職員が醸し出す心地よい雰囲気は、以後の私の教員生活に多大な影響をあたえるものでした。そこには世間一般の教育に流されず若者の教育に邁進しようとする、伝統に裏打ちされた城南高校の姿があるように思いました。このことは如何に時代が変わろうとも教育のあるべき姿を語りかけているように思えます。コロナの嵐が吹き荒れ、課題山積するグローバル化が進む国際社会の中で、新しく生まれ変わった伝統ある城南高校が、自主・自立の精神のもと如何に進路を取らんとするのか、期待を持ち影ながら応援しています。

わが愛しの関西国際空港

井上春夫（昭和29年卒）

三十年勤務した運輸省（現・国交省）を満五十三歳で退職。設立間もない関西空港株式会社に入社。爾来七年間、同社の建設部門担当役員として空港建設工事全般を統括・差配させていただいた。

この事業は、大阪湾内に人工島を埋立造成し、そこに大規模な国際空港を設置しようというもので、当時としては他に例をみないユニークなプロジェクトであった。しかし建設予定地は大阪湾内とはいえ陸岸から遠く離れた遥か沖合の地点、水深は深く地盤も軟弱、事業費は一兆円を超えるという文字通りの難工事、大規模事業であった。当時、世界の主要空港は大量航空輸送時代の到来を迎え、それへの対応に頭を痛めていた最中であったため、日本が始めたこのユニークで野心的かつ挑戦的な企ては注目の的で、国内はもとより、海外からも多数の視察者やメディアの取材を受けていた。来訪者の多くは現地を観て驚きながらも、この野心的なプロジェクトへの期待や賛辞、激励の言葉を残してくれたが、内心では、「日本の優秀な技術力を以ってしても、計画のようにはなかなかうまくは進まないのではないか」との懸念を持った向きも決して少なくはなかったのではないかと思っている。私自身も、正直なところ事業の計画通りの完遂に絶対的な自信を持てていたわけではなく、その困難性と責任の重大さを想うと身のたじろぐ想いであったが、困難に挑む事こそ男子の本懐と覚悟を定め不退転の決意で業務に取組んだ。しかし現実の事業は難題続出、覚悟はしていたものの予想以上に悪戦苦闘の毎日が続いた。それでも、各方面からの支援を受け、知恵もお借りしながら、日の丸を背にした気持ちで一致団結、昼夜を問わず努力して事業の進捗を図った結果、多少の遅れと不本意なかなりの額の事業費の追加を余儀なくされはしたものの、平成六年九月四日、夢にまで見た開港の日を迎えることができた。

新空港に降り立つ皇太子ご夫婦（当時）を先導する井上氏

開港日当日の早朝、快晴のなか日本航空国際線の到着一番機が紀伊水道上空に姿を現わし、朝日に銀翼を輝かせながら無事に滑走路へソフトランディングした時は万感胸に迫り、本当に身が震えた。

開港後の新空港は、心配していた初期トラブルも発生せず、開港約半年後に発生した阪神淡路大地震の際も至近の震源地であったにもかかわらず、耐震性に配慮した設計や施工法が功奏して全く無傷のままであった。就航した内外の航空会社からの評価も、高水準に設定せざるを得なかった空港使用料に対する不満以外は好評で、旅客からの評判も上々であった。航空分野以外の他分野や各方面からも高い評価を戴き、内閣総理大臣顕彰のほか土木学会賞、建築学会賞、土質工学会賞等、得難く価値ある大賞を数多く受賞することができた。誠に光栄で有難く思っている。また海外からも多くの祝福を戴いたが、なかでも米国の土木学会からは、二十世紀の百年間で人類社会に多大な影響を斉した十大ミレニアムプロジェクトのひとつに認定され顕賞されたのは、全く予想外の驚きで望外の喜びであった。

私は、開港の二年後に退社したが、手塩にかけた新空港への想い断ち難く、東京にも郷里の徳島へも居を移さず、空港近くの大阪堺に住いし、難産の末誕生した可愛いわが子を見つめる親の眼差しさながらに、その成長発展を見守ってきた。最近はコロナ禍のため少し足が遠のいているが、時折空港を訪れ昔の苦労など想い出したりしながら、離発着する飛行機や空港内の賑わいを眺めてひと時を過ごしているが、既に八十歳代後半の老人にとって、この唯々ぼんやりと過ごすひと時は、心休まる至福のひと時で秘かな愉しみとなっている。

関西空港はその後も整備が進められ、滑走路も二本に増え、第二ターミナルを擁するまでになっているが、平成三十年九月四日（丁度二十四回目の開港記念日）に、大型台風の直撃を受け空港敷地が広範囲に冠水、タンカーの衝突による橋桁の損傷等深刻な被害が発生した。台風二十号は未曽有の規模で、そのコースも関西空港にとって最悪の大阪湾直撃コースであったし、連絡橋橋桁の損傷も船舶側のミスによる空港にとっては迷惑千万な外部からのもらい事故だったとはいえ、短期間ではあったものの空港閉鎖の止むなきに至ったのは誠に残念、痛恨の極みの出来事であった。被災後、「関西エアーポート」（現在の空港運営会社）によって被災状態の徹底した分析が行われ、護岸の補強嵩上げや防災マニュアルの見直し等が実施された事は承知しているが、今回の被災を奇貨として、海上空港がいわば宿命的に内包している弱点がしっかりと再認識され、インフラとしての一層の強靭化を図るための不断の努力が今後も着実に続けられることをひたすら願っている。

貴方達の持つ力

徳島県サッカー協会副会長　香留（かとめ）和雄（昭和48年卒）

八年前の秋、体調に異変を感じ春藤内科を受診した。春藤先生とは高校の同級生で、①悪性リンパ腫　②大腸癌　③盲腸炎　の疑いがあると言われたが、私が「盲腸炎にまけてくれんか？」と言ったところ、「香留、お前がうちに来るのは苦しい時だけだろ?! ①と思うぞ。」と告げられた。年に数回、同級生で集まり飲食していたが、そのメンバーの多くが医師だった。「お前が病気になった時は、考えられる最高の医療を施してやるからな！」と言ってくれていたが、現実になるとは思いもしなかった。

その後、徳島赤十字病院で悪性リンパ腫と診断（同級生の藤井先生により）、リンパ腫は、胃、腸に広がっており破裂したら最後という中、病院で宿泊して手術に備えてくれていたのも同級生の沖津先生で、会のメンバーだった。

実は姉も同じ病気で、発症から三年で亡くなっていた。「あぁ、自分も死ぬのか…。」と病室から見える燈台の明かりを見ながら、ぼんやりと考えていた。高校サッカー選手権の最中でもあり、選手に対する申し訳なさと、「なんで今?!　なんで自分が?!」と、腹立たしく治療もすんなりと受け入れられず面倒な患者だった。それでも院内の同級生達は、「モンスターペイシェント、元気か？」と声をかけてくれていた。

そんな自分が変わったのは、教え子達の鳴門対徳島市立の試合だった。リードされてもう終了と思われたアディショナルタイム、追いついたのだ。延長・ＰＫ戦を経て残念ながら敗れはしたが、このゲームで選手達

は「最後まであきらめない」という言葉を身をもって私に教えてくれた。その後は、後藤先生の的確な治療の甲斐あり、四ヶ月後には退院し今寛解との診断もいただいた。

長々と病気の事を書いてきたが、高校生の頑張りは人を感動させる力を持っているという事だ。昔、徳島ヴォルティスの高木元社長と話をした時、「Ｊの試合を見て感動したから明日は仕事頑張ろうと思わせるような試合を選手にはして欲しい。」と語っていた。同様に、高校生の皆さんの頑張りは、親の胸を打てる力を持っている。皆さんの頑張りを見て、子供の幸せの為に頑張ろうと親は考えてくれるはずだ。皆さんの頑張りが、親、友人と広がっていき互いに感動の輪が広がっていったなら素晴らしい事だと思う。

教え子に教えられ、素晴らしい友人医療従事者の皆さんに救われた私は、自分の出来る事で少しでも恩返しをと思い、六十七才の老骨にムチ打って、鳴門一中サッカー部コーチも、頼まれた事は全て引き受けている。部活をやるのも良し、勉強に励むのも良し、友達を作るのも良し、全て全力を尽くし頑張って下さい。精一杯やる事で自分も友達も何かを感じてくれるはずだ。

最後に、高校生の皆さんに明るい未来がある事を願っている。

『明日は味方だ !!』

「新居格の世界」講演会覚え書き

四国大学名誉教授　田中敏生（昭和４８年卒）

この会報の去年の号（９５号）に、新居志郎先生の「新居格の徳中時代の処女演説」という文章が載っていました。県立文学書道館で催された新居格（にい・いたる：１８８８～１９５１）の特別展にちなんだものでしたが、その関連イベントの講演会を不肖田中がつとめさせて頂きました。そのとき先生の文章も使わせて頂きましたので、そのお礼の意味も込めて、いささかの覚え書きを記しておきます。

文学書道館からお電話があったのは、２１年の２月ごろだったでしょうか。新居格は旧制徳島中学校の古い卒業生で（明治４０年卒）、小説・評論・翻訳と八面六臂の活躍をしましたが、今では知る人も少なくなりました。研究の蓄積も少ないので、年譜的な事実から確かめる必要がありました。同窓会名簿が役に立ちました。デジタルコレクション（国立国会図書館）で公開している各種の一覧も参照しました（第七高等学校造士館一覧、東京帝国大学一覧など）。あとで分かったことですが、彼は七高時代、マードックという先生に英語を習いました。夏目漱石が一高で教わった先生ですが、このときは鹿児島に来ていました。

デジタルコレクションでは、麻生久の『黎明』や、宮島資夫の『坑夫』『恨なき殺人』なども読むことができました。労働文学と呼ばれるもので、新鮮な印象を受けました。新居格は、どちらにも批評文を書いています（『近代心の解剖』）。文壇の文学とは毛色の違う作品に強く惹かれたのではないかと思われます。

こうして横道にそれかけていたころ、会報が届きました。内容たっぷりでとても元気が出ましたが、何よりも驚いたのは、始めに言った新居志郎先生の文章が載っていたことでした。この記事が蒙を啓いてくれました。徳中時代の演説のことを、それまでは卒業が遅れた理由としてだけ見ていましたが、これを読んだことで、彼が言葉の才能に秀でていたこと、それが泉鏡花など文学作品の愛読とつながること、他方で社会主義文献にも読み耽ったこと、この精神の広がりが後の多方面な活動の礎となったこと、等々の事柄について考えることができました。講演会では、こうしたことを元にして、彼の多面的な活躍や、その根底にある自由な精神などについてお話をしました。

準備不足がたたって、あくせくと落ち着きのないものに終わりましたが、質問の時間になって、新居志郎先生ご本人がお見えであることを知りました。「新居格の専門家ですか」そんな御趣旨のお尋ねだったと思います。まったくそうではなく、にわか作りの講演でしたので、不得要領な言い訳めいたことを、うろたえうろたえ、くどくどとお答えしたように記憶しています。しかし、とにかく先生のお顔を拝見し、少し言葉を交わすこともできました。さすがにこのときは、リモートにしたことが悔やまれました。

ちなみに、新居志郎先生には「忘れ得ぬ恩師のこと」という文章のあることに、あとから気づきました。昔はずいぶん豪快な方もいらっしゃったことが分かって、楽しく読めました（『岡山医学会雑誌』という雑誌に載ったもので、サイニーという論文検索サイトからＰＤＦにたどり着けます）。

６ヶ月の強行軍でしたので泥縄式の準備になったのは致し方ありませんが、それなりに得るところもありました。何よりもよかったのは、新居格という人の通俗的なイメージを一掃できたことです。彼は「モダンガール」を持ち上げて薄っぺらな人気を博した人のように思われていました。しかし、新居自身の書いたものを読んでみると、全くそうではないことが伝わってきます。また彼は、多分にみそっかす意識を持っていたらしく、自分のことを、何度も「タウゲニヒツ」（Taugenichts）と言っています。ドイツ語で無用者・役立たずといった意味を表す言葉ですが、何十冊も本を書き、消費組合や杉並区長で世の中に貢献した人が（『杉並区長日記』という本が最近再刊されました）、まさか無能とは思えません。既成の出世コースに、ちんまり収まり切れない人。豊かで幅広い精神の持ち主。それが本当の姿だったのではないかと思います。もっともっと読んで、この感触を確かめたい。それが今の思いです。

こうして、２０２１年は近頃にない豊かな年となりました。この点だけでも、この立派な先人に感謝しなければなりません。

半導体集積回路（VLSI）技術の進展がSmarter Worldを実現する

国立大学法人　神戸大学名誉教授　吉本雅彦（昭和４６年卒）

１．はじめに。

私は昭和４６年に城南高校を卒業し、今年でもう５１年になります。思い出の担任の先生でいらっしゃった前川先生、北村先生のクラスで城南生活を過ごしました。そして５年前のSSH（スーパーサイエンスハイスクール事業）特別講演会に招いていただき、約1,000名の聴衆の皆様（在学生や教職員、保護者の方々）の前で、お話をさせていただきました。学び舎は全く校舎も新しくなり、スポーツ活動の盛んな学校に生まれ変わっておりました。その時の講演内容をさらにアップデートした内容で寄稿させていただきます。

２．半導体集積回路デバイス（VLSI: Very Large Scale Integration）の進展と私の研究開発

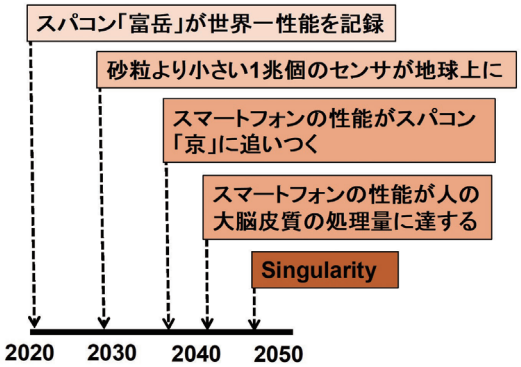
今回の寄稿テーマであるVLSIは端的に言うと、コンピュータの心臓であり、スパコン、パソコン、スマートフォン、ゲーム機、家電製品、自動車、ロボット、通信機器など、あらゆるシステムに組み込まれ、経済、物流、医療、軍備など世界のインフラを支える基幹技術となっています。そのVLSIは、米国インテル社の共同創業者であるゴードン・ムーア氏が1965年に提唱した「集積回路上のトランジスタ数は18ヶ月ごとに倍になる」というムーアの法則に載り、めざましい発展を遂げてきました。すなわち、半導体微細化技術の進展によって、高処理速度化、低電力化、小型化、高機能化、低コスト化の全てにおいて指数関数的な向上がなされてきました。現在では、5nm（ナノメータ：10^{-9}メートル）の微細化技術が量産レベルにあり、最先端のVLSIコンピュータは、約10ミリ角のシリコン片の表面に数十億個のトランジスタを集積し、人の脳のニューロンの総数に匹敵する数に到達する日も間直に迫っています。そして今日の科学技術の指数関数的発展には、この半導体技術の進展が中核的な役割を果たしています。そんなVLSI技術の劇的な進展が始まった頃、私は1977年に三菱電機株式会社に入社しました。それ以来、23年間、VLSI設計技術開発および研究に取り組み、さらにその後、2000年に大学へ移り、若い学生たちの教育および研究に携わり22年になります。

まず、企業時代の1980年代において、大容量記憶デバイスの回路設計技術研究を実施しました。その先駆的研究成果としては、記憶デバイスのデータアクセス時間短縮と消費電流削減を同時に達成できるアーキテクチャを発明し、半導体のオリンピックと言われる国際会議ISSCCで発表し、その論文はVLSI設計の教科書でも多く引用されています。次に1990年代に入り、画像圧縮符号化方式が次々と標準化された時期（1986-1995年）、画像圧縮符号化処理を、効率良く、高性能に実現するためのVLSI開発を行いました。この技術はIT分野で非常に重要で、今や社会インフラである蓄積メディア（DVDなどに用いられるMPEG2, MPEG4, JPEG）、通信メディア（YouTube,）、放送メディア（地デジ、BSなど）実現のキーテクノロジーです。その結果、日本で初めて実用化レベルの画像圧縮符号化LSIの開発に成功し、米国のR&D100賞＊1)を２度受賞しました。これらのVLSIを事業化するために、メーカの世界中の営業部隊から呼ばれ、顧客を回って売り歩いたものでした。おそらく、その結果、海外渡航は100回を超えていると思います。

その後、2000年より大学に移りました。当時すでに、技術者の専門分野の細分化が進み、VLSI開発においても、ハードウエア屋とソフトウエア屋に分業が進み、また一方、システムが大規模複雑になり、システム全体を統括できる技術者が不足し、それがゆえに開発が遅れることが日常茶飯事になっていました。技術者として自己のきちんと立つ位置は固めなければいけませんが、水平方向の異分野、垂直方向の他階層の技術に興味を覚え理解し、システム全体を把握しようとするマインドの重要性を痛感しました。そのマインドは学生時代から育成する必要があるとの思いから大学に移りました。折しも、VLSI分野では、微細化の進展を維持してゆくために多くの課題が表面化してきました。特に電力問題です。コンピュータのダウンサイジングの進展の中にあって、ウエアラブル（身に着けられる）、インプランタブル（体内埋め込み可能）およびユビキタス（身の周りの環境埋め込み可能）コンピューティングの実現には、ワイヤレス、電池レス仕様のための超低消費電力技術が極めて重要な開発対象となってきました。そのような背景の中で、経済産業省や総務省の国家プロジェクトに複数の研究提案が採択され、多額の研究資金にも恵まれ、VLSIデバイスから最終システムまでの垂直統合型研究を指向し、アルゴリズム（処理方式）、アーキテクチャ、回路技術の協調創造により研究成果を挙げました。これらの多階層にわたる設計研究の過程で、Goal-Oriented Mindを有し異分野・学際融合精神を持つ100名以上の学生が育ち（そのうち博士を22名輩出）、IT産業界に巣立ったことをたいへん誇りに思っています。

３．今後の３０年間のIT技術の発展

さて、今後VLSIはどのように進展していくのでしょう（図）。　実は、高性能化のトレンドでみると、スマートフォンに内蔵されるVLSIコンピュータの処理性能は、その時点のトップ性能のスーパーコンピュータの性能を約20年遅れで追っています。すなわち、約20年後にはスマートフォンはスパコン「京」の性能（10PetaFLOPS）を獲得することが期待されるのです。そして、それから数年後に人の大脳皮質の処理能力（60PetaFLOPS）へ到達し、それを基盤にAI処理はますます高度化され無数の高知能ロボットに搭載されるようになるでしょう。さらに2045年には、Singularity＊2)（超知能による科学技術の発展曲線の変わり目）を迎えると言われています。



図．今後３０年間のIT技術の進展予測

一方、ダウンサイジングのトレンドで見ると、現在のIoT＊3)センサーに組み込まれるVLSIは、2030年には5nm技術と３次元実装により、150μm立方に格納されることが予測されています。砂粒より小さいサイズです。それにより、毎年数兆個のセンサーが地球上にばらまかれるTrillion Sensors Universeは現実のものとなり、Zetta(10^{21})バイトさらにはYotta(10^{24})バイトを超えるビッグデータがネットワークに溢れることでしょう。今でも、過去３年で生成されたデータは、その前の４万年で生成されたデータより多いとさえ言われています。

これらの技術革新は、交通・物流、災害対策、エネルギー、公共サービス、農業・食資源、医療・健康などあらゆる領域で新たな価値を生み出し、我々の社会生活をより“smart”に変え、国の科学技術基本計画における**Society5.0**＊4)を実現していきます。そしてこれからのIT業界では、先端技術のトレンドを把握しながら、「社会とサービスを語れる技

術者、研究者」が必要とされます。社会にとって価値ある技術とサービスを創造するためには、多くの仲間が必要です。21 世紀に入り、地球規模で多くの社会課題が表面化しています。少子高齢化、環境問題、都市問題、交通問題、エネルギー問題、食料問題などです。これらの諸課題は一分野のシーズ技術では解決できないほど、あまりに複雑で規模も大きい。そのため必ず異分野との連携が必要になります。1970 年代、欧米を追いかけたキャッチアップ型の時代は、How to make の時代と言われました。1990 年代に入り、日本の経済環境がフロントランナー型へと大きく変わり、What to make が求められるようになりました。そして今や、Whom to make value の時代です。複数の異分野の誰と誰と握って価値創造して勝ち残っていくのか。それが問われる時代です。そのような時代に城南高校を卒業して社会に羽ばたく後輩たちの役割と活躍を大いに期待しています。

４．もっと得意なのは・・・

40 年間の研究開発生活は世界規模の過激な競争の中でストレスフルではありましたが、そんな私の日々の生活を潤したのは、同じく 40 年間続けてきた薔薇栽培でした。神戸の自宅の庭は、季節になると数百輪の薔薇で埋め尽くされます。退職した今は、自分好みに設計した世界で唯一の庭で、自分好みの選び抜いた薔薇の品種に囲まれ、多くの海外渡航で買い集めたワインとともに悠々自適の生活を送っています。

今回、寄稿の機会を与えていただき、ありがとうございました。別な機会があれば、薔薇の栽培技術やワインのうんちくについてもお話ししたいと思います。

＊１：米国の R&D マガジン誌が世界の研究機関 / 民間企業から、毎年過去 1 年間に開発された画期的な技術と製品のうちから 100 点を厳選して表彰する賞。

＊２:「人工知能（AI）」が人類の知能を超える転換点（技術的特異点）、または、それにより人間の生活に大きな変化が起こるという概念。

＊３：あらゆるモノをインターネットに接続する技術。

＊４：第５期科学技術基本計画では、デジタル革新、イノベーションを最大限活用して、経済発展と社会的課題の解決を両立する新たな未来社会（Society）を “**Society 5.0**（ソサエティー 5.0）” として提唱している。

高校時代から現在へ

公益社団法人　大阪市音楽団　三宅孝典（昭和５１年卒）

中学校生活も終わりに近づいた頃、吹奏楽部に所属していた私は、将来は音楽の道に・・・と思うようになり、城南高校に入学した時には音楽芸術系の大学への進学を夢見るようになりました。私が演奏しているのはユーフォニアムという少し大きな金管楽器で、よく響く音が出るため自宅では練習が出来ず、学校での練習を当然のように考えていました。ところが当時校内に機械警備が導入されたところで、学校に生徒が一人で残ることは無理なところを、今では考えられないことですが、楽器の練習場所を確保するために校長先生にお願いして夜９時まで音楽室を使わせていただき、警備のセンサーに引っかからずに校舎を出る方法をも考えてくださって毎日練習出来ました。それでも、幼い頃からの積み重ねが物を言う音楽の世界は厳しいもので、２浪の経験の後、何とか東京藝術大学に入学出来ました。

しかし学校生活は受験一辺倒ではなく、今思うとＦＳ実行委員の経験や古典文学研究部での活動および１泊研修、もちろん吹奏楽部での文化祭などへの出演等を通じて多岐に亘り充実した高校時代でした。反面、楽器のレッスンを受けるために香川県観音寺市（すばらしい先生がいらっしゃいました）や東京まで通うこともあり、学校を欠席することも何度かあり、その意味では模範的な生徒ではなかったのですが、その自由さを寛大に見てくれる城南高校は本当に生徒一人ひとりの立場を尊重してくれた凄いところだと勝手に解釈しています。藝大では芸術祭実行委員を任されることもあり、高校時代の経験はこんなところでも役に立ちました。大学は素晴らしい音楽家の卵揃いで、私などは末端で勉強させてもらっていた感があります。同級生には指揮者の大野和士さんやピアニストの小山実稚恵さんがいます。卒業後は大阪市の直営であるプロの公共音楽団体 “ 大阪市音楽団 ” に１９８３年に採用され、２０１４年に民営化した後も所属し現在に至っています。その他の活動としては京都市立芸術大学音楽学部、相愛大学音楽学部、同志社女子大学学芸学部で非常勤講師を務めています。そしてこれまで非常勤として務めてきた徳島文理大学音楽学部において今年４月からは教授職に採用されました。これからは郷里の徳島にもすこしずつではありますが恩返しが出来れば、と思いながらあわただしい日々を過ごしています。徳島文理大学ウインドオーケストラの指揮者を務めて参りますので演奏会の際にはぜひともご来場いただけるとありがたいです。かつては同窓会には必ず出席していましたが、近年は山形市で活動する “ プロウインド 023” というプロ吹奏楽団に参加しており、そのニューイヤーコンサートが毎年お正月に開催されるため、同窓会には参加出来ていません。いつの日か、また同窓会を通じて皆様と再会出来る時を楽しみにしています。

“二足のわらじ”人生

学校誌「渦の音」第68号に掲載

鹿児島大学名誉教授（医学部・病理学）米澤傑（すぐる）（昭和４３年卒）

「トゥーランドット」の舞台

私の「医学」と「音楽」の“二足のわらじ”人生でのハイライトは以下のようになります。

「医学」では、日本病理学会で最も名誉ある「日本病理学賞」受賞。「高松宮妃癌研究基金学術賞」受賞。各種がんマーカー等の論文の著者世界ランキング第６位（日本人第１位）にランクイン。

「音楽」では、日本クラシック音楽コンクール声楽部門第１位、ならびに、全部門でのグランプリ獲得、太陽コンコルソ・カンツォーネ・イタリアーナ優勝。オペラ「トゥーランドット」の主役･カラフ王子。鹿児島県芸術文化奨励賞受賞。ヨーロッパで録音したCD「誰も寝てはならぬ / 米澤傑テノール・オペラアリア集（G. ステーファノ指揮・ソフィア国立歌劇場管弦楽団）」のヒットチャートでの度々の第１位。

「医学」のこと

この「渦の音」は、卒業生もお読みになり、医学にご興味のお有りの方もいらっしゃると思いますので、ごく簡単に、私の「医学」関連について述べます。「病理学」とは・・・簡単に申し上げますと、「身体から採取された顕微鏡標本で、“がん”か“がんでないか”の最終診断を行っている医学分野で、“がん”をはじめとする様々な病気がどのようにして発生するかという研究も行っています。

私は、2010年４月28日、東京で開催された第99回日本病理学会総会において、宿題報告講演「ムチン：ヒト癌における臨床病理学的意義と遺伝子発現機構の解明から腫瘍悪性度早期診断システムの構築まで」を行い、高い評価を得ることができ、病理学会で最も名誉ある「日本病理学賞」を受賞し、その内容を、その年の年末には「Mucins in human neoplasms: Clinical pathology, gene expression and diagnostic application」という20頁にわたる英文論文として出版でき、私の30年間にわたる「ムチン研究」に関するライフワークをまとめることができました。「宿題報告」とは、日本病理学会独特のシステムで、病理学の研究面で著明な業績を挙げている研究者の中から、宿題報告講演担当者が選ばれ、１年半前に正式に発表され、１年半かけて、さらに、研究を発展させてまとまった講演を行い、講演後には、その研究内容を英文総説論文として発表するようにとの「宿題」が課される訳です。私の研究内容につきましてご興味のお有りの方は、ホームページ「傑作の会」のURL：http://kessaku-no-kai.com/ の「スグル先生の聴診器」のコーナーの米澤の病理学的研究で、そのまとめがご覧いただけますし、宿題報告講演の模様は、「記事 / 対談 / 談話」のコーナーの2012年８月 - 鹿児島市医報 第51巻８号の前半に掲載されています。なお、４月28日の宿題報告講演後、すぐに、東京から京都に移動し、翌日４月29日には、京都会館開館50周年記念「第九演奏会」(指揮：井上道義・京都市交響楽団) で、テノールのソリストを務めるという綱渡りをいたしました。まさに、“二足のわらじ”人生の典型例といえます。

幼少期から中学生まで

私が生まれたのは、鳴門市撫養町林崎という鳴門市中心部からは外れた路地裏でした。祖父母、両親、弟と私の三世代が一つ屋根の下に暮らし、両親はともに学校の教師をしており、私の幼少時期は、祖母に面倒を見てもらうという完全な“お婆ちゃん子”でした。

特に、これと言ったエポックメーキングなこともない幼少児期でしたが、優しくも厳しい祖母に接し続けた幼少児期に、私の性格形成の基礎が築かれたといっても過言ではありません。また、よく振り返ってみますと、件数は決して多くはないのですが、私の「医学」と「音楽」の“根本”が見えてきます。基本的にはとても優しいお婆ちゃんでしたが、イタズラ等をした時には、ズボンを下ろされて、お尻を平手打ちされるという厳しい面もありました。

まさに“一身一体”で祖母と暮らした幼少児期でしたので、祖母が亡くなった小学校６年生の時には、祖母の臨終を見届けた後、思わず外に飛び出し「絶対に死なない薬をつくる！」という”誓い”を叫んだのを、今でもハッキリと覚えています。私の幼少児期の性格形成の根本であった祖母の死は、私の「医学」への道の深層心理的基礎となりました。

私の「医学」が、単に、“医療”だけではなく、“医学研究”という道へ進むのには、父の弟である私の叔父の影響があります。叔父は、高校時代までは私達と同居しており、私もとても良く可愛がってもらいました。早稲田大学理工学部に進学し、橋梁設計の勉強をして大学を卒業する頃に、その叔父が、大学院進学について、自分の兄である私の父にさかんに相談をしており、「教授が研究をさらに進めるために大学院への進学を奨めてくださっている」というようなことをよく話しており、幼心にも“大学教授”という職業があり、敬愛する叔父が自分の将来について相談をするくらい価値の高い職業なのだと思ったものです。その後、大学教授の重要な仕事の一つが「研究」であることを知り、“研究への憧れ”になったのです。幼心の“誓い”と“研究への憧れ”が合体して、最終的に、「医学部教授」という職に就いたということになります。

幼稚園から中学校までは、山も谷もない淡々と日々を過ごしたのですが、敢えてエポックを挙げれば、幼稚園の学芸会で「桃太郎」を演じたことと、中学生の時に徳島県の独唱コンクールに出場したことです。中学校の音楽の先生から、突然、徳島県の独唱コンクールに出場するように命じられ、私自身はもちろん、両親も「お前が歌うのか！？」といった状況でした。“変声期”の頃で、圧倒的に女子生徒に有利な年齢ということもあり、男子生徒は誰も入賞しませんでしたが、私は予選を通過できた男子生徒２名のうちの１名となり、「歌がうたえるんだ」と自覚する大きな転換点となったことは確かです。

城南高校２年生の時には「NHKのど自慢」に出場しました。その頃の「NHKのど自慢」は、現在のようなバラエティ番組ではなく、かなり「コンクール」という側面を持っており、「歌曲の部」「民謡の部」「流行歌の部」と３部に分かれて審査が行われていました。私は、徳島県大会の「歌曲の部」で優勝しました。

その後、医師になってから、プロ歌手も対象としている「日本クラシック音楽コンクール」声楽部門第１位、ならびに、全部門でのグランプリを獲得し、「太陽コンコルソ・カンツォーネ・イタリアーナ」でも優勝を果たしました。

城南高校時代

私は、城南高校へ入学と同時に、バレーボール部と音楽部に入りました。ただ、バレーボール部には部員が４名しかおらず、試合に出ることも出来なかったのですが、日々、トス、アタック、回転レシーブ等の練習をして汗を流すことで満足していました。

音楽部には、歌を趣味にする人達、様々な楽器を演奏する人達の多彩な人物が、かなりの人数集まっていました。高校２年生の時に、私が部長に選任され、秋の文化祭で、ミュージカル「マイ･フェア･レディ」を上演しました。私は、「君住む街角」という美しいメロディの歌をうたうフレディ役を演じながら、総監督と演出を担いました。舞台衣装は、それぞれ個人で準備し、舞台装置も手作り、ピアノの得意な音楽部員が必要なメロディをずっと弾き続ける中、ところどころに、様々な楽器の演奏を加え、“立体感”を持たせるという工夫をいたしまして、「マイ・フェア・レディ」公演は大成功を収めました。

「マイ・フェア・レディ」とともに、私の高校時代の大きなハイライトは、「徒歩旅行」です。まずは、高校２年生の夏休みに、鳴門市から徳島市を経て、山の方に向かって吉野川添いの道をさかのぼり、四国の「へそ」とも言える池田町を経て南下し、高知市を目指すという、全行程２００キロメートルを５日間で踏破するという“大旅行”です。私の親友の２人とともに、３名でこの大旅行に挑戦しました。１泊目は、徳島市の私の叔母の家に泊まりました。２泊目は、徳島市と池田町の中間地点である脇町の安旅館に宿泊、３泊目は、池田町のお寺に宿泊させて頂きました。そのお寺でご馳走くださいましたカレーライスの味を今も忘れることは出来ません。４泊目は、池田町と高知市の中間地店にある大豊町のユースホステルに宿泊し、５日目の夜遅くに高知市に到着しました。高知市到着の直前の小高い山から見た、街の灯りが点灯している高知市の夜景は、いまも瞼に残っています。

さて、この夏の「５泊徒歩旅行」の成功に気を良くして、その年の暮れも近い冬に、後輩と２人で、高松市から鳴門市まで、間にある「讃岐山脈」を乗り越えての全行程８０キロメートルを一気に踏破することを試みました。高知市への夏の「徒歩旅行」は“暑さ”で大変でしたが、この高松市からの「山脈越え縦断」は“寒さ“との戦いで、「讃岐山脈」の頂上付近に達しました時には、雪が降り始め、しかも、完全に道に迷ってしまいました。日は暮れかかるし、このままでは「遭難」という二文字が頭をよぎりました。そこで、私がとった行動は、とにかく出来るだけ高い所に登って、周囲の地理をハッキリ把握しようということでした。急いで、山頂近くまで登りましたところ、眼下の樹木の間に、アスファルトで舗装された自動車道を発見でき、その方向に向かって下山をして、その自動車道に辿り着くことが出来ました。後は、ひたすら、その自動車道を歩き、夜中遅くになって、なんとか鳴門市に帰着できました。自宅に帰り着き、玄関で、リュックサック等の装備を放り出して、しばらくグッタリと横になっていました。まさに「遭難」一歩手前の危ない「山脈越え縦断」でした。

高校２年生の時の修学旅行は、各々の生徒の希望により、「東京方面の有名大学見学ツアー」と「九州方面の温泉旅行」から選択することが可能で、進学校であった城南高校の９割方の生徒は「東京方面の有名大学見学ツアー」を選びましたが、私は迷わず「九州方面の５泊６日の温泉旅行」を選びました。３日目は鹿児島の名勝庭園「仙巌園」のすぐ隣の旅館に泊まり、翌朝は早起きをして、桜島から登る朝日を見て大変大きな印象を受けました。今でも、その光景が目に浮かび上がります。まさに、これで、私の鹿児島大学への進学が決まった訳で、人生の大きな分岐点であったことになります。

鹿児島大学時代とその後

私どもの大学受験の頃は、国立大学受験に関しては「一期校」と「二期校」といった種類分けがなされていました。「一期校」受験で京都大学医学部に合格できず、「二期校」受験を考えた場合、西日本の「二期校」で医学部があるのは、山口大学と鹿児島大学のみで、修学旅行で見た“桜島から登る朝日”により、迷わず、鹿児島大学医学部を受験し、幸運にも合格できました。

入学後、男声合唱団に入部したのですが、声量の大きな私の歌声がどうしても飛び出してしまい、指揮者から、いつも歌声のボリュームを抑えるように注意されることで、とても居心地が悪く、1 年後には、合唱団には別れを告げ「独唱」に力を入れることにしました。教養時代に、私は、取得可能な単位全ての 116 単位を取得しましたが、それでも、時間は有り余り、空き時間には、しょっちゅう教養キャンパスのすぐ隣にある教育学部音楽科のピアノ室に行き、発声練習をしていました。

小さなピアノ室だけでなく、教育学部音楽科で最も大きくグランドピアノのある教授室で練習をしていましたところ、クラリネットの先生が走り込んで来られ、すっかり、大目玉をいただくという覚悟を決めたのですが、なんと、その先生が「貴方はとても素晴らしい声を持っているから、正式に声楽のレッスンを受けなさい」とのことで、まるで、拉致されるようにその先生の車に乗せられ、鹿児島短期大学の声楽教授のところに連れて行かれ、声楽のレッスンを受けることになりました。そのことが、私の声楽テクニックの基礎となり、だんだんと、演奏会で「独唱」を歌う機会も増え、これから述べます井上先生や松本先生との幸運な出会いもあり、一流の指揮者や歌手との共演、オペラ「トゥーランドット」への主役出演、ヒットチャートの 1 位を獲得するような CD のリリースへ繋がり、世界一流の歌手ともジョイント・リサイタルをするような「音楽活動」へ発展し、ニューヨークの音楽記者が『米澤の歌った「清きアイーダ」の最後の高音は、メトロポリタン歌劇場でも聴いたことのない素晴らしいものであった』と世界中に発信してくださるまでになりました。そして、2021 年 7 月 8 日には、故郷・徳島の「あわぎんホール（徳島県郷土文化会館）で開催されました「米澤傑 テノール・リサイタル」で、これまでの私の集大成を歌うことが出来ました。

徳島でのリサイタル

音楽活動へ至る道―“出会い”と“ご縁”

「日本の演奏家 - クラシック音楽の 1400 人」という本が出版されており、小澤征爾さんや辻井伸行さんと一緒に、「米澤傑（医学者 , 声楽家（テノール）鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授）」も掲載されています。その私の項の [印象に残る人物、目標とする演奏家] に、「井上道義、松本美和子―人柄の素晴らしさ」と掲載されていますが、まさに、そのお二方との“出会い”と“ご縁”により、私の音楽活動の場が広がりました。

井上道義先生との“出会い”

井上道義先生との“出会い”は、井上先生が、1985 年に開催されました鹿児島で初めての「かごしま県民第九演奏会」の指揮をなさったことに始まります。この演奏会のソリストはオーディションで選抜されました。テノールに課された「課題」は、マーチの部分のテノールソロでした。このテノールソロを歌うのは大変に難しく、音楽大学の声楽科出身の方々も沢山オーディションを受けましたが、このソロを最後まできちんと歌い通すことが出来ましたのは、私一人のみで、私がソリストに選ばれました。

演奏会本番の 2 ヶ月ほど前に、井上先生が鹿児島にお越しになり、オーケストラや合唱団のレッスンをなさるとともに、会場の鹿児島県文化センターで、ソリストへもレッスンをしてくださいました。レッスン途中で、私が、テノールソロを歌い始めた途端、井上先生は指揮をやめて、ピョンと舞台から飛び降り、ホールの最後部まで走って行って、腕を組んで、私のソロを聴いていらっしゃいましたが、その時は何もおっしゃいませんでした。おそらく、私の声が「そば鳴り」ではなく「いかに遠くまで響くか」ということをお確かめになっていらしたと想像しています。翌年の春、井上先生からお電話を頂き「井上道義です。今度、NHK で“第九をうたおう”という番組をつくるので、米澤さんにテノールのソリストをお願いしたい。」とのことでしたので、喜んでお受けし、東京の NHK に何度か通い、二期会の歌手の方々と一緒にソリストを務めました。

なお、私は、1993 年に、幾つかの演奏会での私の歌の録音を集めた CD「米澤傑 テノールコンサート」（収録曲の多くのピアノを、妻の悦子が担当しています）を自費出版しています。この CD には、井上道義先生の『(1) この国に生まれなかったら、傑はホセ・カレラスのはずだった！ (2) 神に与えられた才能とほんの少しの努力。これが本当の歌う歓び！ (3) 日本中のテノールよ、嫉妬しろ！　井上道義（指揮者、テノール発掘人）』というご推薦のお言葉が掲載されています。この CD をお聴きくださいました世界最高の指揮者のロリン・マセール先生は、色紙に、「To Dr. Yonezawa, Possessor of a lovely voice and “feel” for opera. Good luck」というお言葉をお書きくださり、サインをしてくださいました。

松本美和子先生との“出会い”

NHK の“第九をうたおう”が全国放送され、それをきっかけに、全国各地より「第九」のソリストのお話を頂き、ナポリ市のサン・カルロ歌劇場で開催された「第九のナポリ公演」でのテノールソリストも含め、ベートーヴェン「第九」のソリストは 100 回を超えます。第九アジア初演の地である私の生まれ故郷の徳島県鳴門市で、毎年、全国から合唱団員が集って開催される「鳴門の第九」の関係者の目にも留まり、たびたびテノールソリストとして招聘されました。1996 年 6 月、私が鹿児島大学医学部の助教授であった頃ですが、鳴門の「第 15 回記念第九演奏会」で、国際的ソプラノ歌手の松本美和子先生と初めて共演いたしました。その演奏会の後、松本先生が「1 週間後に、イタリアの高名なオペラプロデューサーのジャンフランコ・パスティネ先生が東京にお越しになるから、是非、貴方の声を聴いていただきたいの！」とのことで、パスティネ先生と松本先生にオペラアリアやカンツォーネをお聴きいただきましたところ、お二方揃って、私のイタリアオペラ界へのデビューを強力にお勧めくださいました。

まず、松本先生が「私には実績があります。超一流会社にお勤めであった方を、退職させて、ミラノ・ヴェルディ国立音楽院に留学させ、バリトン歌手に育て上げました。」とおっしゃって、「貴方も歌手に転向して、イタリアデビューをすれば良いのに」と、パスティネ先生と二人で、強力にイタリアで歌うことをお薦めくださいましたが、私が医学の道を他に変える意志がないことをハッキリ申し上げましたところ、「では、オペラシーズンの 1 ヶ月半だけイタリアで歌い、あとは、医学部で仕事をしていいから」とまでおっしゃってくださったのですが、当時、助教授であった私は「3 年後に教授選があり、立候補します。医学部の教授選はかなりの難関で大変ですから・・」と申し上げましたところ、お二方ともやっとご了解くださいました。

私は、小学校卒業文集の「将来の夢」に、「大学教授」とハッキリと書いており、その頃から、大学での研究生活に憧れていましたので、お二方からの熱心なイタリアデビューのお勧めをあっさりお断りした次第です。「amazon」での通販サイトで、私の CD「誰も寝てはならぬ / 米澤傑 テノール・オペラアリア集」へのコメントとして、「日本にもこんなに素晴らしいテノール歌手が出るようになったのかと驚いた。「天は二物を与えず」とは昔から言われているが、この米澤先生には天は二物を与えた。鹿児島大学医学部教授として病理学の研究を続ける傍ら日本有数のテノール歌手として我々凡人には考えられない。声も素晴らしく、歌も理知的で知性がある。若い頃から歌一本で活躍していたらと残念に思う。まさに日本のマリオ・デル・モナコの声を持つ医学部教授である。」とお書きくださっています。

CD「誰も寝てはならぬ / 米澤傑 テノール・オペラアリア集」に至る道

私は、CD「誰も寝てはならぬ / 米澤傑 テノール・オペラアリア集」を発行する前に、1993 年には CD「米澤傑 テノールコンサート」を、2002 年には、霧島の「みやまコンセール」でのリサイタル（ピアノ：久邇之宣）と、「日本・ルーマニア国交 100 周年記念コンサート（指揮：尾崎晋也 / ルーマニア国立トゥルグ・ムレシュ交響楽団）」で歌いました録音を収録しました CD「米澤傑 テノールの魅力」という自費出版の 2 つの CD をリリースしていました。そのうち、私の声楽活動の集大成として、フルオーケストラとの共演での「オペラアリア集」を発行したいと思うようになってきていました。

ちょうどその頃、大手レコード会社から直接お電話を頂き、「先生のお声で、これまでの通念を完全に覆すような“日本歌曲集”の CD を収録したい」というご提案を頂きました。“フルオーケストラでのオペラアリア集”で頭がいっぱいであった私は、そのご提案を即座に断ってしまいました。今、考えますと、もったいないことをした・・・とも思えます。なお、その時にお伺いしてみたのですが、「“フルオーケストラでのオペラアリア集”は、大手レコード会社であっても、費用的にとても無理である」とのことでした。

私の熱心なファンの方が、日本最高の録音技師、録音ディレクター、ならびに、録音プロデューサーにお声掛けをくださり、東京で、私の“フルオーケストラでのオペラアリア集”の CD の作成に

ついて相談をしましたが、暗礁に乗り上げてしまい、話が進まなくなってしまいました。そこで、思いきって、松本美和子先生のお宅に伺いご相談を申し上げましたところ、その場で、すぐにイタリアのジャンフランコ・パスティネ先生にお電話をしてくださいました。

我々ではどうしようもなかったことが、どんどんお話しが進み、数日のうちに、パスティネ先生が、イタリア人指揮者のジョヴァンニ・ディ・ステーファノ氏とブルガリアのソフィア国立歌劇場管弦楽団にご依頼をしてくださり、2004年のゴールデンウィークに、ソフィアで最高の「ブルガリアホール」を借りきって録音を行うということまで決まりました。ゴールデンウィークの始まりに合わせてすぐにイタリアに飛び、指揮者のステーファノ氏とピアノを使っての打ち合わせを行った後、ソフィアに入り、３時間、３時間、６時間、３時間と４日間連続で歌い続け、計15時間で15曲（1時間で1曲のペース）の収録をするという“離れ業”で録音を致しました。1時間に1曲録音ということの実際は、まず、初対面同士の指揮者とオーケストラだけで音合わせを行い、次いで「小さな声で歌ってみて」と、曲想も含めた打ち合わせと試し歌いを行い、そして、「はい、本番テイク」ということで、本番収録となり、ほぼ“一発録り”というペースで録音が行われてゆきました。オーケストラのメンバーから「あんた喉が強いネ！」というお言葉まで頂きました。松本先生とパスティネ先生もずっと収録に臨んでくださり、松本先生は、そのCDのジャケットの「このアルバムに寄せて」というライナーノーツに「四日連続でこれだけの難曲を録音できたテノール歌手はかつて誰もいません。米澤さんはこの驚くほかない離れ業を成し遂げてしまったのです。」とお書きくださっています。

以上のような収録でしたので、全ての経費を私一人で負担いたしまして、気の遠くなるほどの費用がかかりましたが、幸い、NHKの芸術劇場やラジオ深夜便をはじめ、沢山のマスコミにお取り挙げ頂き、ヒットチャートの第1位をたびたび獲得するほど良く売れましたので、CDのリリースから、かなり早い期間で、CD作成に掛かった費用を全て補填することが出来ました。日本人テノール歌手で、フルオーケストラでのオペラアリア集を発行できていますのは、プロ歌手を含めても、私一人のみであるという「希少価値」も、このCDが良く売れた一因であると考えられます。

タワーレコードのランキング

CDのヒットチャート第１位獲得

私のCD「誰も寝てはならぬ / 米澤傑 テノール・オペラアリア集」が、ヒットチャートの第1位を獲得するほど売れましたのには、高名な音楽評論家の故・黒田恭一先生のご推薦と応援が大きいことも確かです。黒田先生は、「家庭画報（第47巻第10号、2004年）」で『今、黒田さんが最も注目するオペラ人』の２名をお挙げになり、１名は「サイモン・ラトル＋ベルリン・フィル」、そして、もう１名が「米澤傑」でした。その記事では、「マリオ・デル・モナコの声を持つ医学部教授に出会う」という題目で、黒田先生と私との対談が掲載されています。

さらに、音楽雑誌の「モーストリー・クラシック」（通巻第91号、2004年）の“巻頭言”『黒恭の感動道場』に、私のCDについて「玄人 / 素人の壁超えた歌唱に驚き」という記事をお書きくださり、「サライ」のような一般雑誌へも紹介記事を、そして、なんと、「BURRN！」という“ヘビメタ”の雑誌にまで「オペラを見事にきかせるテノール、しかしてその正体はうたうお医者さん･･･！？」という紹介記事をお書きくださいました。CDの帯には「天から授かった珠玉の喉を磨きに磨いて、その声を本物のテノールのものにした米澤傑。一級のテノールをきいたときだけに味わえる至福の瞬間！（音楽評論家 黒田恭一）」というご推薦のお言葉を、ジャケットのライナーノーツには「聴け！これがテノールだ！」というタイトルで「テノールのうたいあげる情熱がいかに純粋で、ひたむきで、熱いかを実感したかったら、米澤傑の声と歌唱に真摯に耳を澄ますに限る。まさにこれがテノールである。」とお書きくださっています。

高名な音楽プロデューサーの中野雄先生も、音楽雑誌の「モーストリー・クラシック」（通巻第162号、2010年）に、『上杉春雄（ピアニスト）と米澤傑（テノール）―天は二物を与える？　医学と音楽の二足のわらじ―』という記事で、札幌の神経内科医でピアニストの上杉先生と、鹿児島の病理医でテノールの私を、“日本の医学界には、「東の上杉、西の米澤」と並び称される、２人の鬼才が活躍している。”とご紹介くださっています。さらに、その“続編”として、「モーストリー・クラシック」（通巻第188号、2013年）に、『再認識しよう―脳は決して疲れない　天が二物を与えた上杉春雄と米澤傑の後日談』という記事で、美智子皇后陛下御臨席のもとサントリーホールで開催された「モーツァルト・レクイエム」での私のソリストの模様などを、私の専門の「病理学」での活動と共にお書きくださっています。そして、2021年９月に発行されました「モーストリー・クラシック」（通巻第294号、2021年）に『天は二物を与える・再論　医師・テノール歌手　米澤傑の現在』という記事で、私の「医学研究」について、この上なく判りやすく、かつ正確にお書きくださり、私の「音楽への道」につきましても、「声楽との出会い」から、名指揮者の方々との共演や「トゥーランドット」に至るまでを躍動的にお述べくださり、イタリアデビューをしていたら「本場で活躍する稀有な邦人テノール」が誕生していたかも知れないが、「米澤は医学部教授への道を選択、日本の医学界は貴重な人材を失わなくて済んだ。」とおまとめくださっています。

2019年12月には、新しいCD「米澤傑 テノールライブ～オペラアリア・カンツォーネからミュージカル・映画音楽まで～」をリリースいたしました。ライブ録音ですので、私の「一発勝負の歌」というスリルとともに、コンサート会場での臨場感（新型コロナウイルス感染症拡大の前に録音されていますので、一曲ごとに、客席からの“ブラボーや歓声の嵐”をお聴きいただけます）を味わっていただけます。中野雄先生は、このCDの帯に「誰も聴いたことのない歌声！　世紀のテノール米澤傑　白熱のライブ（音楽プロデューサー 中野雄）」というご推薦のお言葉をくださいました。

オペラ「トゥーランドット」への出演

2005年イタリアでは、ジャンフランコ・パスティネ先生のご推挙により、サンタマルガリータの夏の音楽祭での野外劇場で、日本では、神奈川県藤沢市民会館で、オペラ「トゥーランドット」の主役・カラフ王子を演じました。藤沢の「トゥーランドット」では、舞台装置だけで8,000万円、総額は億単位の費用がかかったとのことで、全幕の収録がDVDとして販売されています。

「トゥーランドット」DVD

日本でのオペラ「トゥーランドット」（ベリオ版・日本初演）の公演は、2005年の11月の藤沢市民会館でしたが、総監督・畑中良輔、指揮・若杉弘、演出・栗山昌良、という当時の日本最高の布陣で、私以外の歌手は、全て、二期会のトップスターの方々でした。その「トゥーランドット」公演の２年前に、突然、畑中良輔先生からお電話をいただき、「２年間あげるから、“トゥーランドット”のカラフ王子役の勉強をして、藤沢市民オペラで、カラフ王子役を歌い演じなさい。」とご下命を受けました。早速、ピアノ譜でも厚さが３cmはある「トゥーランドット」全曲の楽譜とCDを購入し、鞄には、楽譜とCDを入れておき、通勤時、電車やバスに乗っている時間などには、いつも楽譜を眺めながらCDを聴いて、とにかく歌詞とメロディを覚えるという作業に入りました。ピアニストでもある妻にもピアノを弾きながら歌ってもらい、まさに“口移し”でメロディを教えてもらう、ということもしょっちゅうでした。本番の４ヶ月前くらいからは、演出家のもとでの「舞台稽古」が始まり、月曜日から金曜日までは、医学部教授としての仕事を行い、土曜日の一番便で藤沢へ行き、１泊２日で「舞台稽古」に参加し、日曜日の最終便で鹿児島に帰り、また、教授職の仕事を行うという“二重生活”が続きました。いま思い返しましても、まさに“ゾッと”するような４ヶ月間でした。しかし、本番で、見事に、カラフ王子役を歌い演じきり、幾度にもわたる“ブラボーの嵐”のカーテンコールの後、幕が降りた舞台上で、演出の栗山昌良先生から「これで、ひとりのテノールスターの誕生だな！」とおっしゃっていただきました。まさに「長～い苦しみ、一瞬の喜び」の典型例で、その瞬間があるからこそ、長く苦しい練習にも耐えられるのです。

「トゥーランドット」の舞台

おめでとうございます

令和３年　春の叙勲　受章者

◆瑞宝重光章　高井新二（70）（昭和 44 年卒）元仙台地方検察庁検事正＝検察官功労

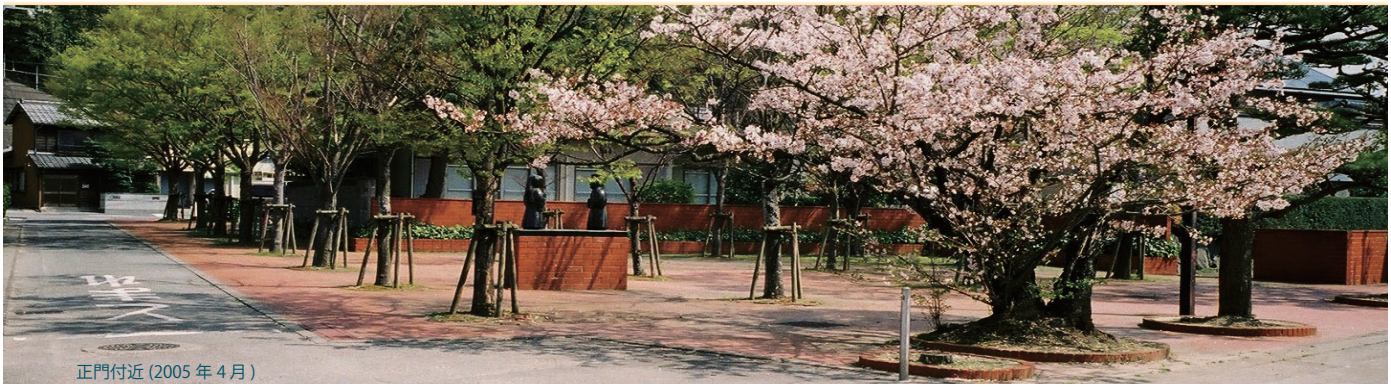
令和３年　秋の叙勲　受章者

◆瑞宝小綬章　何野博喜（73）（昭和 42 年卒）元徳島県企業局長＝地方自治功労
　米澤孝治（77）（昭和 38 年卒）元徳島県警察本部刑事部長＝警察功労
　木村宏（78）（昭和 36 年卒）岡山理科大学名誉教授＝教育研究功労
◆旭日双光章　井川雅典（71）（昭和 44 年卒）元徳島県歯科医師会専務理事＝保健衛生功労
　石黒成人（79）（昭和 36 年卒）元高知県医師会常任理事＝保健衛生功労
◆瑞宝双光章　三原正路（78）（昭和 37 年卒）学校歯科医＝学校保健功労
◆瑞宝単光章　浅田洋子（65）（昭和 50 年卒）元徳島市民病院看護師長＝看護業務功労

令和４年　春の叙勲　受章者

◆旭日小綬章　齋藤義郎（77）（昭和 39 年卒）徳島県医師会長＝保健衛生功労
◆瑞宝中綬章　金品昌志（80）（昭和 35 年卒）徳島大学名誉教授＝教育研究功労
　森田信義（80）（昭和 36 年卒）静岡大学名誉教授＝教育研究功労
◆瑞宝双光章　生駒元（76）（昭和 39 年卒）元公立中学校長＝教育功労
◆瑞宝単光章　富岡治美（65）（昭和 50 年卒）元徳島市消防団分団長＝消防功労

※敬称は省略させていただきました。（年齢は受章当時）


正門付近 (2005 年 4 月)

同窓会本部事務局からのお知らせ

本年 5 月 29 日（土）に、オンラインにて同窓会役員会が開催され、令和 3 年度の決算及び事業報告、令和 4 年度の予算及び事業計画を説明し、承認されました。

6 月 25 日（土）に城南高校大会議室において開催された理事会には、校長先生にもご出席いただき、役員会で話し合われた事項の審議を行い、承認を得ました。

8 月 14 日（日）に予定していました総会・懇親会については、新型コロナウイルスの影響を鑑みて開催中止とし、学年理事の方々に、令和 3 年度決算・事業報告、令和 4 年度予算・事業計画及び役員人事の資料をご送付し、書面議決の形を取らせていただきました。

コロナ禍で、皆さまと直接にお会いすることがなかなかできませんが、本会報や、昨年はあまり活用を進められなかったホームページを改良・充実させて、活動の報告や、会員の皆さま相互の交流を深めていけますよう工夫してまいります。

そして、コロナが収束したあかつきには、また皆さまとお会いして、活発な意見交換や楽しい交流ができますことを楽しみにしています。

2021年　渦の音クラブ（関東支部）活動報告

事務局　三橋浩志、三橋（田井）稔子（昭和59年卒）

渦の音クラブ（関東支部）は、関東在住の旧制徳島中学校と城南高校卒業生の相互の交流と、母校の支援を目的として活動しています。会報の発行、総会の開催、若手会員交流会の開催、年３回の理事会の開催、母校の東京開催（全国大会）の激励などの活動をしています。2021年度（令和３年度）は、会員交流として「2021年度・第46回渦の音クラブの集い（総会・交流会）」をオンライン（Zoom）で開催しました。オンラインのメリットを活かし、徳島の同窓会本部事務室には粟飯原会長、船越事務局長とともに、前田校長先生、元職員の大西先生にも参加いただきました。城南高校の近況、城南高校生の活躍などをお聞きしました。また、徳島県東京本部の今津副本部長（昭和61年卒）からは、徳島県を巡る近況を報告いただきました。次に「コロナ禍の１年を語ってみた」というテーマで、東野光宏さん（平成４年卒）から「コロナと付き合うホルン吹きの話」、プロ写真家の中田浩資さん（平成６年卒）から「海外だけではない、国内の良さにも触れることができた１年」のプレゼンでした。新型コロナ禍でもポジティブな城南高校卒業生のお話を聞き、元気になることができました。

懇親会での、ビールを注ぎながら「何年のご卒業ですか？」と交流していた様子をオンラインで再現すべく、卒業年を超えてランダムに設定した４人から５人のグループで、自由に意見交換するブレイクアウトセッションを設定しました。卒業年、出身中学、部活動などの自己紹介から、今の徳島や城南高校との関わりなどをもとに、自由に意見交換しました。20分程度の意見交換を２セット行いましたが、「時間がなかった、もっと交流したかった」という声が多く聞かれました。

その後、全参加者で、賀川会長のコーディネイトのもと、「徳島を語る」時間も設定しました。東京から見た徳島の良さや課題などを自由に語り合いました。また、徳島県東京本部からの「徳島特産品プレゼント」をかけた「ブラ城南クイズ」も企画しました。「城南富士（勢見山）の標高は？」や「「自主自律」碑の「阿波青石」、正式名称は？」などのクイズに、真剣に回答いただきました。最後は、「旧制徳島中学校歌」と「城南高校校歌」をオンラインで合唱し、閉会となりました。2021年度は、常時25人から27人、延べ30人強の参加者が集まり、オンラインでも同窓のきずな、つながり、交流を深めることができました。

若手交流会

理事会（幹事会）は３回開催しましたが、６月と９月はオンライン、２月は対面とオンラインのハイブリッド方式で開催しました。オンライン開催のメリットを活かし、徳島の役員の方にもオブザーバーでご参加いただきました。

さらに、これから幹事学年となる世代と、幹事学年を終えたばかりの学年の交流を深めつつ、50歳以下の会員発掘を目的に、2012年から「若手会員交流会」を参加費無料で開催しています。2021年の「第10回渦の音クラブ若手会員交流会」は、10月２日（土）の20時から、完全オンライン（Zoom）での開催でした。2021年の幹事学年の平成３年卒と、来年の幹事の平成４年卒しか集まりませんでしたが、途中から、昭和63年卒の皆さんも参加し、学年を超えた同窓会の良さなどを語っていただきました。今年は【2022年９月10日（土）16時より】開催します。

「2022年度・第47回渦の音クラブの集い」は、感染対策を講じながら、ホテルニューオータニ「ガンシップ」で、【2022年10月23日（日）】の開催を予定しています。詳細は下記の通り。

2022年度・第47回渦の音クラブの集い（総会・講演会・交流会）

日　時：2022年10月23日（日）　12時より（受付開始11時30分より）

場　所：ホテル・ニューオータニ「ガンシップ」（ガーデンコート棟４階）

講演会：岡部斗夢氏（NPO法人アクア・チッタ理事・事務局長、城南高校・平成４年卒）

『水辺の夢のまちづくりー万代中央ふ頭での音楽と水辺空間を巡ってー（仮題）』

会　費：8,000円（ただし平成10年以降の卒業生は4,000円）

集合写真（オンライン交流会）

2021 年 城南 FS 会 (近畿支部) 活動報告

支部長　武田邦雄（平成 13 年卒）

同窓会近畿支部 (城南 FS 会) では毎年、定期的な役員会や年に 1 回大阪梅田の新阪急ホテルで総会を行っています。役員会では今後の同窓会の活動方針などを話し合ったり、総会は会員同士の世代を超えた交流の場として非常に有意義な会となっております。本来であれば例年開催していた総会ですが、コロナ禍という事もあり 2020 年は開催中止を余儀なくされる状況でありましたが、2021 年 9 月に新阪急ホテルにて感染防止対策を十分に実施したうえで総会を開催致しました。同窓生同士の近況報告や、大阪天水連様の阿波踊りの実演など、2 年ぶりの開催ということもあり大いに盛り上がりました。

1 年に 1 回こういった交流の場があるのは嬉しいもので、お互いの近況報告などで盛り上がり、話し足りなくてそのまま 2 次会へ流れていくのが通例となっております。

私は 2001 年城南高校卒ですが、FS 会を通じて人生の諸先輩方に様々なお話を伺えることは非常に楽しく、また徳島の歴史についても深く知る事ができ毎度知的好奇心をくすぐられております。諸先輩方から伺った徳島の歴史話がきっかけで、大阪の取引先の方と私の祖先が同じ時期に蜂須賀公に仕えていたことが判明したりなんて事もありました。その方と今では身内のようなお付き合いをさせていただいており、こうした縁をつむげたのも同窓会に参加したおかげだなと感じております。

令和 3 年度の総会は緊急事態宣言下での開催という事もあり、ZOOM などの非対面で行うべきかどうかという意見も分かれた中で、前述のように世代を超えた交流という意味で対面開催して良かったと個人的には感じています。コロナウイルス感染症の収束までもう少し時間を要しそうではありますが、2022 年度も対面での開催ができればと思っております。また、FS 会の発展のため近畿圏に在住の同窓生への参加呼びかけも重要な活動であり今後の課題です。現在は会報誌などを中心に同窓会の周知や参加呼びかけを行っています。今後はホームページや Instagram などの SNS を活用して 1 人でも多くの同窓生に向けて発信できればと考えております。住所が変わっていたり姓が変わっていたりで同窓生を集めていくための諸課題はありますが、同窓会の日々の活動が大きな力となり、ひいては徳島県の地域活性化につながればと思っております。

今後も同窓会をより楽しい場とするための様々な活動を計画しています。城南同窓生のお知り合いが近畿圏にいて、まだ FS 会に参加されていない方がいらっしゃいましたら是非お声がけいただければと存じます。もしかしたら初めての参加は敷居が少し高いかなと感じておられる方もいらっしゃるかもしれませんが、参加いただければ同郷の話や思い出話に花が咲き、きっと楽しんでいただけると思います。

2020 年度の城南 FS 会は、10 月 16 日 (日)11 時半から、堂島の 中央電気倶楽部 5 階ホールで 開催予定です。 お時間ございましたら是非ご参加いただければと存じます。

今後の益々の同窓会発展に向けて尽力していく所存ですので、引き続き同窓生の皆さま方のお力添えをいただければと存じます。

後援会活動（令和 3 年度実績・令和 4 年度計画等）について

城南高等学校後援会長　酒池由幸（昭和 50 年卒）

旧徳中・城南高等学校同窓会の皆様におかれましては、益々ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げますとともに、後援会活動へのご理解、ご支援をいただいておりますことに 心からお礼を申し上げます。

３年度の支援事業として、①大型液晶ディスプレイ　２台（理科棟用、大会議室用）②自習室用パネルデスク（7 セット）を寄贈することとし、３月２日に目録を贈呈しました。支援金額は約８１万円です。

大型液晶ディスプレイ装置

自習室パネルデスク

一方、後援会への会費寄付金の納入については、個人３５名の方から４５万４千円、団体として阿波銀行、徳島県庁、徳島大正銀行、日亜化学工業、四国放送、徳島新聞社の６支部から計５５万８千円余のご協力をいただき、合計で１０１万２千円のご入金をいただきました。

令和４年度の後援会の支援事業については、学校側と協議の上、適切な支援を行って参りたいと考えておりますので、本年度も一層のご協力をお願い申し上げます。

後援会ホームページ URL
同窓会のホームページと共用
https://jonan-ob.com

◆会費等振込先◆

会費は一口 5,000 円（何口でも可）
口座名はいずれも「城南高等学校後援会」

金融機関名	店番号		口座番号
阿波銀行本店	100	普通	1192723
徳島大正銀行本店	001	普通	7815411

（ゆうちょ銀行　口座 記号 番号 01680・2・60805）

同窓会報は 皆さまからのご支援で発行できています

発行ご支援金の御礼とお願い

今年の会報はいかがでしたでしょうか。
何名かの同窓生にご寄稿いただきました。
全国で活躍されている城南高校同窓生の方々や 城南で教えていただいた先生の懐かしいお顔が見えましたでしょうか。

関東支部、近畿支部では、少人数での開催やオンラインを併用したりと、
コロナの影響を受けつつも、工夫をこらして同窓会活動を続けています。
そんな様子もご覧いただけたでしょうか。

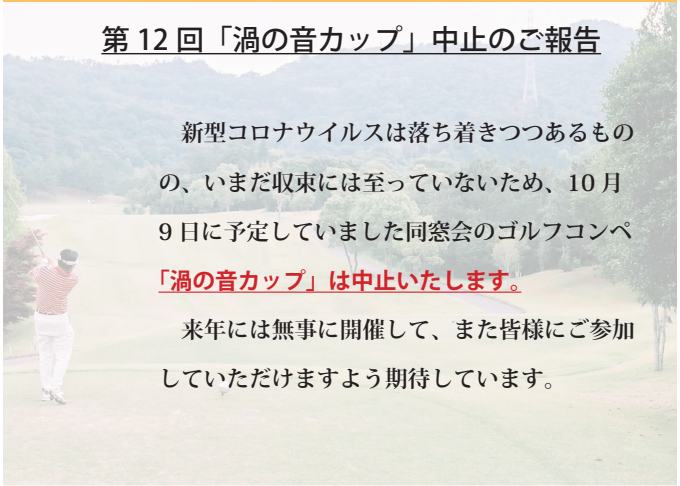
これからも同窓会報の発行を続けていくためには、皆さまのご協力が欠かせません。
現在の状況では、今後、ページ数や発行部数を見直したり、
ひいては発行できるかどうかを検討していかなければならなくなります。
どうかご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

ご支援金は一口 2,000 円です（何口でもかまいませんので、よろしくお願いいたします）。
別紙の振込用紙をご利用いただくか、下記口座にお振込みいただくこともできます。

ゆうちょ銀行から；口座番号　00140-0-710668　城南高校同窓会会報係
他の金融機関から；ゆうちょ銀行　〇一九店（ゼロイチキュウ店）
当座 0710668　ｼﾞｮｳﾅﾝｺｳｺｳﾄﾞｳｿｳｶｲｶｲﾎｳｶﾞｶﾘ

旧徳中・城南高校同窓会ゴルフコンペ

第 12 回「渦の音カップ」中止のご報告



新型コロナウイルスは落ち着きつつあるものの、いまだ収束には至っていないため、10 月 9 日に予定していました同窓会のゴルフコンペ「渦の音カップ」は中止いたします。

来年には無事に開催して、また皆様にご参加していただけますよう期待しています。

編集後記

★今年の同窓会報をお届けします。今回、編集作業をいざというとき頼りになる麻植健作君（昭 51 卒）にご協力いただきました。感謝です。フレッシュな気持ちで紙面も「主役は同窓生！」を心がけました。みなさんのご感想ご提案を同窓会事務局までお寄せください。
ご支援もよろしくお願いします。（春）

★いつもながら、〆切間際までアタフタ、バタバタ。あ、あれ忘れてた、これ違った…の繰り返しでしたが、抜群のスキルをお持ちの心優しき同窓生に編集をお願いし、無事に出来上がりました。麻植さん、ほんとにありがとう！　皆さんの力作を御味読ください。（舟）

★「レイアウトのお手伝い」とのことでお引き受けしたものの、なにをすれば良いのか、時間も無くどうなることやら !! って状況でした。昨年のデザインを引き継がせていただき、なんとか形にできたかな？ほっ !! としています。（麻）

☆ 10 ～ 12 頁の米澤傑さんのエッセイは、今春発行の学校誌「渦の音」第 68 号に掲載されたものをこの会報にも載せていただきました。

事務局の案内

同窓会などのお問い合わせは下記の事務局までお願いします。
同窓会・後援会ホームページもご活用ください。

旧徳中・城南高等学校同窓会事務局

〒 770-8064
徳島市城南町 2 丁目 2-88 城南高校内
船越隆子　（昭和 51 年卒）
Tel. : 088-652-0084
FAX : 088-656-0484
info@jonan-ob.com
https://jonan-ob.com
Face book

渦の音クラブ（関東支部）事務局

〒 112-0001
東京都文京区白山 4 丁目 24-17
三橋浩志（昭和 59 年卒）
info@uzunooto.jp
http://uzunooto.jp
Face book

日々の活動はフェイスブックでも発信中
「渦の音クラブ」に「いいね」をよろしく

城南 FS 会（近畿支部）事務局

〒 665-0845
宝塚市栄町 3-1-11-903
事務取扱は下記まで
〒 771-2501
徳島県三好郡東みよし町昼間 573-2
糸田川廣志（昭和 42 年卒）
FAX : 0883-79-3270
hiro4823ito@yahoo.co.jp